

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）
県政の課題（テーマ）報告書

令和 7 年 12 月 21 日

山梨県知事 殿

氏 名 河野 碧海
留 学 先 オーストラリア・シドニー工科
大学

留 学 期 間 令和 7 年 2 月 4 日
～ 令和 7 年 11 月 27 日

1 県政の課題（テーマ）

貧困、孤立、学力に関わる格差の拡大、児童虐待やヤングケアラーなどの子どもたちが直面している課題

2 概要

県政の課題（テーマ）を解決に導く考え方及び対応策等

1. 留学の総括と「教育」への新たな視点

私は、将来の山梨県を担う子どもたちの育成に貢献したいという決意を胸に、シドニー工科大学での 10 か月間にわたる留学に挑んだ。当初の目的は教育学の専門性を深めることにあったが、実際の留学生活は、予定していた教育の理論を学ぶ場を超え、一人の人間として多様な価値観が対立する社会のリアルに身を投じる時間となった。人前で話すことが苦手で、模擬授業でも苦悩していた私が、異国の地で直面したのは、言葉の壁だけでなく、生活習慣や文化の違いから生じる衝突であった。しかし、この衝突こそが、現在の山梨県が直面している「孤立」や「格差」といった教育課題を解決するための、極めて重要な視点を与えてくれた。この報告書では、留学生活での葛藤から得た「個と向き合う対話」の重要性を軸に、山梨県の子どもたちが直面する困難を克服するための対応策を論じたい。

2. 留学での葛藤：ステレオタイプという壁

留学中の私を最も苦しめ、かつ成長させたのは、国籍が異なるルームメイトとの共同生活である。キッチンやバスルームの使い方、ゴミの処理、強烈な匂いを放つ料理など、些細な日常の積み重ねが絶え間ないストレスとなった。当時の私は、「あの国の人は掃除をしない」「この文化圏の人は自分勝手だ」と、相手を国籍や文化という枠組みで「括る」ことで、理解し合えないことを正当化し、諦めていた。また、カフェでのアルバイトでは、私自身が「英語の話せない日本人」というレッテルを貼られ、いじわるをされたり、孤立感を味わったりする経験もした。この時、私は自分が他人を「括って」いたのと同時に、自分自身もまた「括られる」ことで、一人の人間として

の尊厳や可能性を否定される痛みを知った。しかし、限界を感じて始めたルームメイトとの対話は、私の認識を根本から変えた。言葉を尽くして話し合う中で、相手には相手の生活の論理があり、譲れない価値観があることを知った。「〇〇国の人」ではなく、名前を持つ「一人の人間」として向き合った時、初めて共生の糸口が見えたのである。この経験は、私が教師として子どもたちと向き合う際の原点となった。

3. 山梨県が抱える教育課題と「括ること」の危うさ

「山梨県総合計画」が指摘するように、本県の子どもたちは貧困、孤立、ヤングケアラー、学力格差など、多岐にわたる困難に直面している。これらの課題に対し、我々大人は無意識のうちに「貧困家庭の子だから」「ヤングケアラーだから」と、その背景だけで子どもを括り、偏見の目で見たり、可能性を限定したりしてはいないだろうか。留学先で私が感じた「どうせ理解し合えない」という諦めや、バイト先で受けた「括られることによる疎外感」は、まさに山梨の学校現場で孤立している子どもたちが抱えている感情そのものである。家庭環境や経済状況という背景は、その子を構成する一部ではあるが、全てではない。子どもを一人の「個」としてではなく、属性というフィルターを通して見てしまうことが、結果として子どもたちの自己肯定感を奪い、さらなる孤立を招いているのではないかと考える。

4. 課題解決に向けた考え方

① 属性で括らない「個」へのアプローチ

教師自身が、生徒を家庭環境や学力などの属性で括ることを自戒しなければならない。私がシドニーで学んだ「対話の必要性」を現場に持ち込み、生徒一人ひとりの声に耳を傾ける。特に表面化しづらいヤングケアラーや虐待の問題に対しては、教師が一人の人間として生徒の小さな変化に気づき、属性を超えた信頼関係を築くことが、孤立を防ぐ第一歩となる。

② 失敗を許容する

人前で話すのが苦手だった私が、不完全な英語でも受け入れられる経験を通じて自信を得たように、学校を間違えてもいい場所にする。学力格差や経済的困難があっても、学校に行けば自分の存在が認められるという安心感があれば、子どもたちは自ずと意欲を取り戻す。

5. 具体的対策

課題が複雑化する中で、学校だけで全てを解決することは不可能である。留学で学んだ主体性とコミュニケーション能力を活かし、以下の対応策を提案したい。

① 学校・家庭・地域の「対話型ネットワーク」の構築

教師が学校に閉じこもるのではなく、地域のボランティアや専門機関、行政と積極的に対話を行う。留学先で多様な人々と協力した経験を活かし、ヤングケアラーや貧困家庭を社会全体で支える仕組みのハブとなる。

② 「自己表現」を軸とした英語授業の展開

正しい英語ではなく、「自分の考えを伝える英語」を重視する。自分の背景や思いを言葉にし、他者に認められる経験を積ませることで、生徒の自己肯定感を高める。これは、自己表現が苦手な子どもたちが社会と繋がるためのリハビリテーションにもなる。

6. 山梨の未来を担う教師としての決意

留学前、私は「人前で話すのが苦手な自分が教師に向いているのか」と悩んでいた。しかし、シドニーでの等身大の経験と、そこから生まれた対話の経験を経て、考えが変わった。完璧な教師である必要はない。むしろ、自分自身が弱さを知り、葛藤し、それでも他者と向き合おうとする姿勢を見せることこそが、困難の中にいる子どもたちの希望になるのだと確信している。山梨県に恩返しをするということは、単に知識を授けることではない。留学で身につけた「括らずに個を尊重する」という覚悟を持ち、誰一人として置き去りにしない教育を実践することである。多様な背景を持つ子どもたちが、自分の生まれ育った山梨に誇りを持ち、自分らしく未来を切り拓いていけるよう、私は一人の表現者として、そして伴走者として、教壇に立つ所存である。